Benesse®

表紙／裏表紙
東京都 ● 品川区立八潮わかば幼稚園

『これからの幼児教育』刊行によせて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幼広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

お問い合わせ先
0120-933-964 通話料無料
受付時間 10:00～17:00（日曜・祝日は除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。
※携帯電話・PHSからもご利用できます。
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、**086-214-6337**へおかけください（ただし通話料がかかります）。

1THE14

これからの幼児教育 2012 春
2012年1月20日発行 発行人 新井健一 編集人 後藤憲子 発行所 ㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ次世代育成研究所

©Benesse Corporation 2012

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

2012 春 Spring

これからの幼児教育

第1特集

子どもの力を引き出す園での信頼関係

園内研修用ワークシート付き

インタビュー ● 東京大学大学院教育学研究科教授 **秋田喜代美** ／ 東京成徳大学子ども学部教授 **神長美津子**

第2特集

保育者の「良さ」「強み」を生かす15のアイディア

データから見る幼児教育

災害への対応として大事なもう一つのこと
～ネットワークづくり～

園運営や保護者への発信にご活用ください

Benesse® 次世代育成研究所

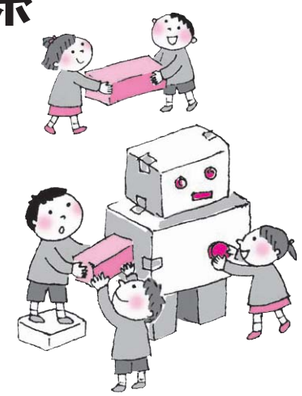
これからの幼児教育

2012 春 Spring

CONTENTS

2 第１特集

子どもの力を引き出す園での信頼関係



2 インタビュー●理論編1
信頼できる人や環境をベースとして学びは芽生える
東京大学大学院教育学研究科教授 秋田喜代美

5 インタビュー●理論編2
子ども同士の信頼関係を援助して子どもの育ちを支える
東京成徳大学子ども学部教授 神長美津子

8 実践編
ワークシートを使った園内研修で信頼関係を育む援助を共有する

14 データから見る幼児教育

災害への対応として大事なもう一つのこと
～ネットワークづくり～

17 調査データを踏まえ、園ができるもう一つの対応について考える
恵泉女学園大学大学院教授 大日向雅美

18 第２特集

保育者の「良さ」「強み」を生かす15のアイディア

聖徳大学児童学部教授 篠原孝子

24 『これからの幼児教育』120%活用のヒント

ベネッセ次世代育成研究所とは

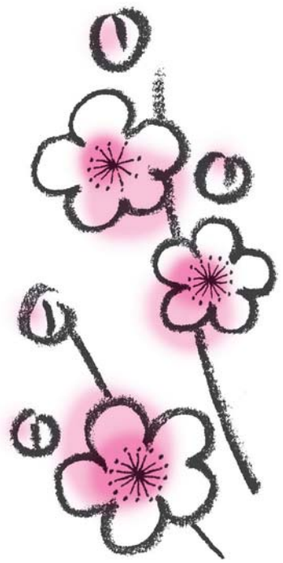
少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家のかたがたに発信し、よりよい子育て環境をつくる一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

はじめに



年度末を目前に、それぞれのクラス、学年が集団づくりの仕上げに取り組んでいる時期ではないでしょうか。

集団の力を生かした保育を展開するために、子ども同士、また、子どもと保育者の間でどのような信頼関係が築かれるべきか。今号の特集では「園での信頼関係のあり方」を見直し、日々の保育へと結びつけていきます。

また、第２特集は若手保育者の「良さ」「強み」をどのように引き出すかをテーマに展開します。園長と保育者、そして保育者同士の信頼関係を、更に強くするための視点としてお読みいただければと思います。

卒園・修了式まであと少し、すべての子どもたちと保育者の皆さんが、さらに生き生きとした笑顔でしっかりとつながっていくことを信じて、本誌をお届けいたします。

第1特集

子どもの力を引き出す園での信頼関係

遊びを通した学びの芽生えには、子ども同士、そして子どもと保育者の信頼関係が重要です。子どもにとっての「信頼」の意味と保育者の役割を考えます。

インタビュー ● 理論編1

信頼できる人や環境をベースとして学びは芽生える

子どもが安心して園で過ごすうえでの基盤となるのが、園や保育者との「信頼関係」です。信頼とは、安心感や愛着とはどのように異なるのか。また保育者と子どもとの間、また子ども同士の間に信頼関係を育むには何がポイントとなるのか。東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。

安心感や愛着が土台にあれば、不安なときやトラブル時にも信頼関係は深まる

社会の変化に伴って「信頼」がより重要に

子どもの学びの芽生えを支えるためには、子ども自身の、周囲に対する「信頼感」がカギを握っています。一般に信頼感は、安心感や愛着などと混同して使われますが、これらを分けて考えることで、子どもを見取りやすくなるでしょう。

少し難しい言い方になりますが、信頼とは、「人や周囲の環境に対して期待して行動するための社会生活の基本」です。一方、安心は、「慣れ親しんだ閉じた関係の中における居心地のよさ」と言えるでしょう。信頼も安心もどちらも大切ですが、社会が複雑さを増し自分とは異質なものとかかわる機会が増えている現代においては、信頼が一層重要になってきていると言われています。

というのは、昔は地域から出ずに知り合いだけとかかわって生きていくこともできました。そうした状況であれば特定の人や環境に対する安心感だけで毎日を過ごせます。しかし、現代はいろいろな人やものと出合い、適切な関係を築きながら、自分を形づくる社会になってきています。新しいものに出合ったとき、ベースに信頼関係がなければ、「これは自分にとってかかわるべきものかどうか」という判断の基準をもつことができません。

子育ての場面を例にあげて説明しましょう。子どもが信頼している人、例えば母親や保育者から「これをやってごらん」と言われたら、最初は戸惑ったとしても、「お母さんが言うのだから」と、新しいことにチャレンジしてみようという気持ちになるでしょう。つまり、保育者や友人などの周囲の人との信頼関係がベースになって、新しいものを受け入れているのです。同じように園でも、人や周囲のものを信頼できる環境をつくることで子どもの学びの芽生えを生み出すことができるのです。

東京大学大学院教育学研究科
教授
秋田喜代美
あきた・きよみ
子ども・子育て新システム検討会議ワーキングチーム委員。著書に、『保育のみらい』（ひかりのくに）、『くらしの素顔―保育の場の子どもたち』（フレーベル館）など。

安心や愛着を土台として信頼関係が築かれる

「信頼の学習の基盤は幼児期に作られる（※）」と、ニクラス・ルーマンというドイツの社会学者は言っています。これは信頼が安心や愛着と密接に関係していることを示唆しています。まず土台として安心や愛着があり、その上に信頼関係が築かれていくのが基本的な形とイメージしてください。

特に乳児期の子どもは、母親や保育者との愛着が何より大事です。この時期の子どもは、自分の欲求を言葉にできませんから、それを保育者がくみ取って満たしてあげたり、欲求がかなえられないときでも抱きしめて安心させることで、子どもは「この人は自分を間違いなく支えてくれる」と直感的、本能的に安心し愛着をもち、信頼するようになります。

普通、乳児期は、他の子どもの遊びに長時間、興味を示しません。しかし、大好きな保育者が他の子どもと遊んでいるのを見て、「自分もやってみたい」とトライすることがあります。これは、保育者との信頼関係が遊びの世界を広げていく例と言えるでしょう。そのようにして子どもの遊びが広がれば、「明日も園に来たい」という期待がさらに高まります。それが園そのものへの信頼の第一歩にもなるのです。

遊びのきっかけの提示から信頼関係が生まれることも

「登園しぶり」も園や保育者との信頼関係に深く関係しています。ある園では、子どもが門の前で泣いていると、保護者と保育者が話している姿を子どもに見せます。子どもが最も信頼する保護者が、保育者と親しげにしているのを見て、「どうやら大丈夫かな」という気持ちが生まれるのです。

園内に入ってきたけれど保護者と離れると泣いてしまう場合は、次のようにして園に対する安心や信頼を育みます。例えば、「よい靴をはいているね」などと注意を向け、靴に少し砂を落として「園にはね、お砂があるんだよ、サラサラサラ……」などと話しかけます。すると、子どもは砂という特定のものに興味をもち、没頭することで不安を忘れ、「園には面白いものがありそうだ。先生はお母さんとも仲がよさそうだし……」と、しだいに園に対する安心や信頼が芽生えます。

信頼関係がベースとなって遊びや学びの芽生えが起こるのが一般的ですが、この子どものように最初に遊びのきっかけを与えることで、それを提供してくれた人への信頼が深まるという逆のケースもあるのです。

※ニクラス・ルーマン『信頼―社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房（1990）

子どもとの信頼関係を理解するポイント

◎安心感や愛着は信頼関係の土台となる
学びの芽生えを支えるには、子どもが保護者や保育者に抱く安心感や愛着が不可欠。そのうえに信頼関係を育むことで学びの芽生えが起こりやすくなります。

◎信頼関係は遊びの中で最も育つ
子どもが興味をもつ遊びを提示したり、子どもが遊びの中で困っているときに手助けをしたりすることで、園や保育者に対する信頼感は高まっていきます。

◎一人ひとりの子どもに合わせた保育が信頼関係を深める
一人ひとりの子どもの育ちやテンポに合わせた保育により、子どもの気持ちや要求にていねいに応えることで、しだいに信頼関係が深まっていきます。

信頼関係を深める発達段階ごとのポイント

乳児期
◎愛着関係が何より重要です。子どもの心を満たして愛着関係を深めることが信頼関係につながっていきます。

↓

幼児前期（3、4歳児）
◎遊びがしだいに複雑になり、友だち関係も深まります。トラブルも増えますが、子どもの安全を守ったり、感情を受け止めたりする保育者のサポートで仲間同士の信頼関係は深まっていきます。

↓

幼児後期（4歳児後半以降）
◎子どもがさまざまな課題を解決するうえで、知恵を貸したり、手立てを講じたり、手助けをすることで信頼関係が育ち、深まります。次の遊びへの期待を膨らませるように心がけることも大切です。

楽しいときより不安なときに信頼関係が深まっていく

幼児期になると、遊びが複雑になり、友だち同士の関係も深まります。それに伴い、感情が高ぶったり、友だちとトラブルを起こしたりすることも増えるでしょう。信頼関係は、楽しいときよりも、むしろ不安を抱いたり困ったりしたときに生まれやすいものです。保育者が子どもの身体的な安全を守ったり、感情を受け止めて落ち着かせてあげたり、子どもを「助ける」存在になることで、信頼関係が深まっていくのです。

子ども同士が衝突したとき、「仲直りしたね。よかったね」と終わらせるのではなく、「○○ちゃんは、こういうことを言いたかったんだよね」と、お互いの意図を伝え合う代弁者となるのも保育者の大切な役目です。「自分の気持ちをわかってくれている」「公平に扱ってくれている」といった子どもの気持ちは、保育者への信頼に直結します。さらに、相手の意図を理解することで、友だち同士の信頼関係もできていくでしょう。

トラブルが起きたときは信頼関係を深める機会

4歳児後半以降は、遊びの中で課題を解決する場面が増えます。何かをつくりたいけれどうまくいかないとか、ある子どもとうまくかかわりながら遊べないとか、さまざまな課題を解決するうえで、知恵を貸したり、手立てを講じたりすることで、子どもに新しい世界を開いていくのが保育者の役割です。ちょっと大げさな言い方かもしれませんが、子どもが「危機」に陥ったときほど、信頼関係を深める機会となると思います。

4、5歳になると、遊びへの期待をつくり出すことも重要です。例えば、帰りの会で「今日は面白かったですね」と一日を振り返って終わるのではなく、その日の遊びを踏まえて、「明日はこんなことをしてみようか」などと語りかけ、子どもに期待をもてるようにします。そうすることで、「園は楽しいところだ」という場への信頼につながっていきます。

子どもの心身の安定をはかる「養護」の側面とともに、「この先生はいつも楽しいことを提案してくれる」など、新たな世界を開く「教育」から芽生える信頼関係も大きく、それらは一体であることを覚えておいてください。

また信頼関係を育むには、一人ひとりの子どもの育ちに合わせた保育が重要であることも忘れないでください。保育者の力量や園の環境にもよるでしょうが、子どものテンポに合わせて接し、要求にていねいに応えることで、子どもの園や保育者に対する気持ちは深まっていくでしょう。

現場のみなさんへ

園は、子どもが大人になって社会で生きていくうえで不可欠な力を育てる場です。社会では自分とは異なる考えをもつ人たちが一緒に過ごしていくことになりますが、そのうえで周囲の人やものとの信頼関係はなくてはならないものです。信頼関係が最も育つのは、子どもが楽しく過ごす遊びの時間ですので、先生方にはこれからも遊びを大切にして子どもの成長を支えていただきたいと思っています。そのようにして身につけた信頼関係は、子どもにとって生涯にわたる贈り物になると思います。

インタビュー ● 理論編2

子ども同士の信頼関係を援助して子どもの育ちを支える

子どもたちの間に十分に信頼関係が育まれていれば、たとえトラブルがあっても、子どもは自分たちの力で解決していきます。クラス運営の基盤となる子ども同士の信頼関係を育むポイントについて、東京成徳大学の神長美津子先生にうかがいました。

子どもたちの力を信じながら、保育者は信頼関係構築の支援を

クラスに居場所があることが信頼関係の基盤となる

クラス運営における信頼関係の基盤になるのが、クラスの中に一人ひとりの居場所があるかどうか、ということです。子どもにとっての居場所は発達段階によって異なり、乳児期や2、3歳児は保育者との関係性の比重が大きいですが、4歳児後半以降は友だちとの人間関係が深まり、周りの子どもが自分をどう見ているかがより重要になります。

そのため、子どもと保育者、そして子ども同士のかかわりをいかに育てるかが、クラス運営の肝と言えます。3、4歳児は言葉がまだ発達途上ですから、自分の思いを上手に友だちに伝えられません。そういう場面で、「隣にこんな思いをもっているお友だちがいるよ」と保育者が伝えることで、自分と同じ思いや異なる思いをもつ子どもがいることを理解し、相手への尊敬や尊重の気持ちが育っていくのです。

友だちと一緒に世界を広げていく「協同的な学び」

信頼関係を育てるには、協同的な学びがポイントになりますが、協同的な学びの意味を取り違えている場合もあるようです。見た目の「協同」にとらわれて、単なる一斉活動になっているケースをよく見受けます。本来の協同的な学びは、課題に取り組むときにひとりでは気づかなかったことに気づいたり、自分にはない友だちのよさを発見したりすることが本質的なねらいです。

もっとも子どもたちは、4、5歳児になれば急に協同的な学びに参加できるわけではありません。それ以前からクラスの中に居場所を感じたり、保育者との間に十分に愛着関係や信頼関係を育んでおく必要

東京成徳大学子ども学部教授
神長美津子
かみなが みつこ
宇都宮大学教育学部附属幼稚園に勤務の後、文部科学省 初等中等教育局 幼児教育課教科調査官（国立教育政策研究所 教育課程研究センター教育課程調査官併任）を経て、現職。実践的な視点で幼児期の発達と教育について研究する。

があります。

幼児期における協同的な学びの体験は、小学校以降の教育につながっていきます。学びとは、未知のものと出合い、それを受け入れ、自分の世界を広げていくことだと言えますが、これは独力では限界があります。友だちと一緒に何かをつくったり、解決したりする体験は、まさに学びの本質に迫るものであるわけです。

固定したグループだけでなく多くの子どもが接する場面を

そのような学びを成立させるには、子ども同士の信頼関係がベースになくてはなりません。子ども同士の信頼関係を育む援助には、いくつか重要なポイントがあります。

まず保育者が、子どもが表現することをしっかりと受け止めることです。言葉だけでなく、子どもが訴えようとしている気持ちも含めて受け止めることが大切です。保育者のそのような態度は、子どもたちに伝わり、自然とお互いの表現を受け止め合う雰囲気が生まれます。特別なニーズをもつ子どもに対しても、保育者が気持ちを尊重して接することで、他の子どもも自然に接するようになります。保育者がいわばモデルになっているのです。

いろいろな子どもと出会う場面をつくることも大切な援助です。4、5歳児になると、好きな友だちと遊ぶことが増え、仲間関係が固定化します。仲良しのグループで存分に遊ぶのも大事ですが、固定化した友だち関係の中だけでは、一人ひとりの表現が限定される可能性があります。発言が強い子どもばかりが主張をするということも起こり得るでしょう。

そのため、当番活動などで他の子どもと接する機会も大切にしてください。いろいろな子どもが接する活動では、それまでは見えなかった子どものよさが引き出されることがありますし、友だち同士でお互いにできること、できないことを認め合えるようになるでしょう。

一例をあげると、ある園で、主張の強い子どもがいたのですが、カメの世話の当番活動で、その子どもがカメをさわれないことがわかりました。他の子どもの中には、「○○くんは強いけど、カメをさわれないんだな」と、相手のことを理解するとともに、自分に自信をつけたケースがありました。

ただ、注意を要するのが、内気な性格などが要因で、クラスの中に5、6人ほどどのような関係の中でも自分を表現できない子どもがいることです。その場合は、保育者が個々にケアする必要があるでしょう。

子ども同士の信頼関係を育む5つの援助

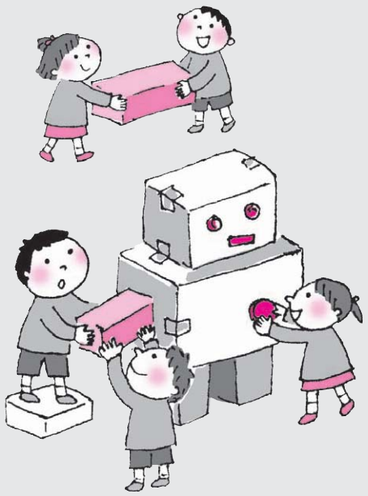
1 保育者が、子どもの表現していることを受け止める
言葉に出されたものだけでなく、何を訴えようとしているかを含めて、子どもの思いをしっかりと受け止める

2 いろいろな友だちと出会う場面をつくる
固定化されたグループだけでなく、いろいろな子どもと出会う場面をつくることで、一人ひとりのよさが引き出されやすくなる

3 クラス全員が光り輝く場面をつくる
それぞれの子どものよさを見いだし、それをクラス全体に上手に伝えることで、子どもが自信をもつことができる

4 トラブルの解決はできるだけ子どもに任せる
保育者が一方的に解決に導くのではなく、モデルになったり、解決へのヒントを示したりして、子ども自身が解決する場面を大切にする。そのためには子どもを信じて任せることが不可欠

5 みんなでひとつのことをやり遂げる体験をする
全員でひとつのことをやり遂げることで、「クラスの一員」であることを実感し、園や友だち、保育者への信頼感が深まる



すべての子どもが光り輝ける場面の演出を

一人ひとりの子どもが光る場面を演出することも、子ども同士が認め合う関係をつくるうえでは欠かせません。

その際に注意したいのが、逆にプレッシャーを与えないことです。なかなか自分を表現できない子どもに、「○○ちゃんは上手にできたよ。みんなの前で発表してごらん！」と言ってしまっては、子どもは負担を感じるかもしれません。保育において難しいことのひとつですが、保育者が一人ひとりのよさを見いだして、それをどのような形でみんなに伝えるかを、常に課題として考えるとよいと思います。

ある園に4歳で入園し、他の子どもとなかなかかかわれない子どもがいました。その子どもが5歳のときにつくった絵本が素晴らしかったので、クラスの図書コーナーに置くことにしました。すると、みんなにその子どものよさが伝わり、その子どもも自信をもって周囲に溶け込めるようになったという事例があります。

最近は、周囲の評価を気にして、4歳児後半くらいから劣等感を抱く子どもが増えているようです。少子化ということもあり、父母や祖父母など多くの人たちからの期待を受けることで、逆に自己発揮ができなくなっているのかもしれません。そういう子どもには、保育者が「あなたは、あなたらしくていいね」などと勇気づけてあげましょう。

愛情をもって突き放す援助が成長につながることも

5歳児後半になると、子ども同士が衝突するなどトラブルが頻繁に起きます。その際、保育者が一方的に導くのではなく、保育者が問題解決のモデルとなったり、解決の視点を提示したりして、子どもたちの力で解決するように促すことが大切です。トラブル自体は大きな問題ではなく、トラブルの解決の仕方を学ぶよい機会と考えるとよいでしょう。

そのためには、子どもの力を信じなくてはなりません。保育者が「解決しなくては」と前に出てしまうと子どもは引っ込んでしまいます。5歳児であれば、ときには突き放す、言い換えれば子どもに任せる援助を取り入れてください。子どもは自分たちで解決したことに満足感を得るとともに、任せてくれた保育者を信頼して、それまで以上にがんばるようになるでしょう。

クラス全員でひとつのことをやり遂げる体験も、一体感を生み出すうえで大きな効果があります。「自分はクラスの一員だ」と感じたとき、子どもはクラスの中に居場所を見出し、他の子どもや保育者への信頼関係が育っていくのです。

現場のみなさんへ

トラブルが起こったとき、保育者がパッと解決してしまうのではなく、子どもを取り巻く人やものとのかかわりを踏まえながら、解決を手助けすることで信頼関係はできていくものだと思います。そのためには、保育者が真剣に子どもと向き合うことは欠かせません。子ども同士の信頼関係ができあがって子どもがしっかりと育っていくことで、園に対する保護者の理解も深まっていくでしょう。

実践編

ワークシートを使った園内研修で信頼関係を育む援助を共有する

エピソード記録を活用したワークシートを使って、
子どもと保育者、また子ども同士の信頼関係を育む援助について考えてみましょう。

監修／東京成徳大学子ども学部 神長美津子

保育の多様な「層」をていねいに理解して援助の質を高める

信頼関係を育む場面を園内研修で共有

園内研修の特長は、目の前の子どもの実態に即して園や保育者が抱える課題に向き合えることにあります。それぞれの保育者が園外研修で持ち寄った知識を共有する場としても効果的です。

2011年春号では、子どもの様子を表す「4コマイラスト付きワークシート」を利用した園内研修について紹介しました。ワークシートの長所は、記入する時間を設けることで保育者が自分の考えを整理できる、記入後に話し合うために意見交換が活発になる、などがあります。

今号では、「学びの芽生え」のベースとなる「信頼関係」を生み出すにはどのような援助が必要であるかを園全体で共有するために、ワークシートを活用します。

10ページ以降に掲載している2種類のワークシートは、いずれも保育者が「子どもとの信頼関係にかかわる」と感じて記録した実際の保育の場面がもとになっています。参加者がワークシートを読み、各々の考えを記入し、話し合うというのが大まかな流れです。基本的にファシリテーターとなる先生がリードして話し合いを膨らませていきます。

エピソード記録を活用したワークシート型研修

エピソードを用いたワークシート型研修のよさについて、東京成徳大学子ども学部の神長美津子先生は次のように話します。

「ビデオは時間の流れなどが分かりやすいですが、ズームにしてしまうと子どもの周囲の状況が分かりにくいこと、写真は瞬間の様子は分かりやすいのですが、背景となる状況が伝わりにくいことなど、記録方法には一長一短があります。エピソード記録の場合、保育者が思いや背景を書き込めるため深い部分まで突っ込んだ話し合いがしやすいというよさがあります」

保育は、それぞれの場面が、子どもの個性や思い、保育者の考え、友だちとの関係性……など、多様な「層」が絡み合って成り立っています。こうした層をていねいに理解するうえでも、エピソード記録をベースとしたワークシートは役立つと

言います。

「ひとつの場面を切り取って、その場面がどのような層によって構成されているかを話し合うことで、ふだん、無意識に取り組んでいることが意識化されて、保育者の資質の向上をもたらしますし、園としての保育方針の共有にもつながるでしょう」（神長先生）

エピソード記録を用いたワークシートをそれぞれの園で作成する場合は、参加者が場面を共有しやすいように、できるだけ保育者や子どもの具体的な言葉や動き、表情などを描写するとよいでしょう。

研修の進め方例

所要時間 45〜60分

1 研修についての説明

5分

ファシリテーターが研修の流れとねらいを説明します。ワークシートの概要とともに、POINT❶〜❸に沿って自分の考えをまとめることを伝えます。

2 ワークシート記入

10〜15分

個々の保育者がワークシートに記入します。「正解はない」「思ったことは何でも書いてよい」などと伝えると、自由な考えを書きやすくなるでしょう。

3 ワークシートをもとにした話し合い

20〜30分

記入内容をもとに話し合います。順番に発表するよりも、ひとつの考えを広げたり、反対の考えと比較したりすると、話し合いが深まりやすくなります。

4 まとめ

10分

研修を通して学んだことや感じたことを発表し合います。

ファシリテーションのポイント

>>> すべての意見を尊重し、受け入れる

すべての意見を尊重することで発言しやすい雰囲気になります。例えば、若い保育者が遠慮していたら、「○○さんはどうかな」と発言の機会をつくり、「そういう考え方もあるね」などと受け入れる姿勢を示しましょう。

>>> 自分の意見を述べ過ぎない

ファシリテーターが「この場面は、こう考えるべき」などと意見を述べ過ぎると、参加者がその考え方に影響されてしまうことがあります。ファシリテーターは、話し合いの調整役に徹しましょう。

>>> 似ている場面の経験や異なる意見を聞いてみる

話し合いが停滞したら、「似ている場面を経験したことはあるか」「異なる考え方をした人はいるか」「自分が子どもの立場だったらどう感じるか」といった投げかけによって、参加者の視点を変えてみるとよいでしょう。

>>> 結論や正解を出す必要はない

「今日の話し合いをもとに、自分の保育を見つめ直し、明日からの実践に生かしてください」といった言葉で締めくくるとよいでしょう。

コピーしてお使いください

「信頼関係を育む援助」 園内研修用ワークシート 1

管を曲げて水を流したいのに、うまくいかない……

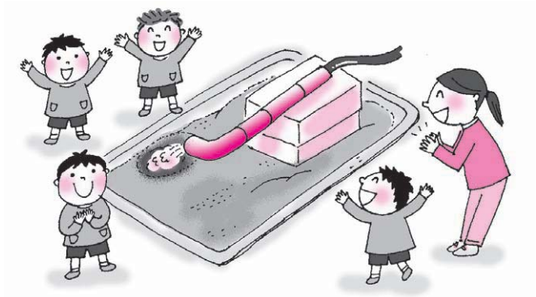
名 前：

年齢と時期	場 面
5歳児・6月	砂場

あらすじ 年長の男児４人が砂場で「ダム工事」をしています。いろいろとアイディアを出し合いますが、なかなかうまくいきません。

年長の男児４人が、砂場にプラスチック製の管で水を流してダム工事ごっこをしています。ひとりが「こっちの大きな穴にも水を流そう」と言うと、みんなが賛同。ただ、その穴に水を流し込むには、管を曲げてつなげる必要があります。「管をビニール袋でつなごう」「段ボールを使う？」と考えを出し合いますが、うまくつながりません。

しばらく見ていた担任が「何か困ってるの？」と聞くと、「いろいろ試したけど、うまくいかない」と答えます。担任は「すぐに先生に助けてって、言いに来なくなったね。みんなで相談しながら、いろいろ試しているんだね。先生、いいものを知ってるんだ」と言って、管をつなぐジョイントを持ってきて、「これならどうかな？」と渡します。４人は管をつなげることに成功。「こんな風にしたかったんだ！」「先生、いいもの知ってるね！ありがとう」と大喜びでした。



POINT❶ グループ内での子ども同士の関わり合いの状況はどうでしょうか。

記入欄：

POINT❷ 保育者のどういう援助が信頼感につながったと考えますか。

記入欄：

POINT❸ 保育者の援助のタイミングはどうでしょうか。あなたならどうしますか。

記入欄：

ファシリテーター向け

園内研修用ワークシート 1 「管を曲げて水を流したいのに、うまくいかない……」

研修の進め方と解説

適切なタイミングで教材を提示し、めあてが実現できるようにする

この場面では子ども同士、そして子どもと保育者の二つの面から信頼関係を育むことがポイントになります。子どもたちがアイディアを出し合い試行錯誤して目標に近づいていく遊びの中で、互いに協力することを学ぶことで、グループで物事を進める「協同」関係の基礎が身に付いていき、信頼関係にもつながっていきます。

しかし、どうしても子どもたちだけでは実現できない場合は、保育者の出番となります。このとき、適切なタイミングで入り、それまでの子どもたちの努力を認めることが信頼関係の第一歩となります。

POINT❶ グループ内での子ども同士の関わり合いの状況はどうでしょうか。

「ダム工事」はうまくいきませんが、アイディアを出し合い、目標に向かっているという点では、子どもたちの間に関係性が育っていると言えるでしょう。さらに、試行錯誤の過程で、徐々に目標に近づいている様子が見られます。学び合いの姿が見られている点では、子どもたちの間に信頼関係が育ちつつあることもうかがえます。

POINT❷ 保育者のどういう援助が信頼感につながったと考えますか。

子どもたちが知らなかったジョイントを保育者が渡すことで、「ダム工事」は完成しました。あまり早いタイミングで渡してしまうと、子どもたちの試行錯誤の機会を奪ってしまいかねませんが、適切なタイミングで教材や方法を提示することで、「助けになってくれた」「よい方法を教えてくれた」といった保育者に対する信頼感につながると考えてよいでしょう。目標を実現させるには他の方法もあったかもしれませんが、この保育者は適切な道具を提示することで成功に導きました。声かけなどの精神的な援助だけではなく、教材をはじめとした必要な物を提示することも信頼関係の構築につながる例と言えます。

POINT❸ 保育者の援助のタイミングはどうでしょうか。あなたならどうしますか。

保育者は、「何か困ってるの？」と話しかけましたが、この入り方は話し合いの余地があるかもしれません。それまでの成果を見て、「すごい、こんなアイディアもあるんだね」「でも、ここだけが残念だね」などと、一旦、子どもたちのつくりあげたものを褒めれば、スムーズに「仲間」として入ることができたかもしれません。子どもたちだけでは解決が難しい場面に保育者が援助をする際、タイミングや入り方によっては、「先生に聞いたほうが楽だ」という意識をもたせてしまいかねません。それではなかなか意欲の喚起や信頼関係の構築はできません。どのような援助が子どもたちとの真の信頼関係に結びついていくか、みなさんで話し合ってください。

「信頼関係を育む援助」　園内研修用ワークシート 2

ソウタ君は、もう絶対、仲間に入れない！

名 前：

年齢と時期	場　面
5歳児・5月	鳥小屋・砂場

あらすじ　年長の男児４人のグループ（タカシ、ソウタ、サトシ、アキラ）は、小鳥の世話の当番をすることになりました。しかし、ソウタは遊んでいて、やろうとしません。すると、タカシが怒り出しました。

タカシが「鳥かごの掃除をしよう」と言いますが、ソウタは砂場で遊んでいます。ソウタ以外の３人がその場を離れると、ソウタが追いかけてきてタカシを叩きました。タカシは「ソウタ君はもう絶対仲間に入れない」と怒り、サトシも同意します。アキラは困った様子です。ソウタが黙ってうつむいているうちに、３人は鳥かごの方に行ってしまいます。ソウタはそばにいた担任の顔を見ます。担任が「みんなとお話をしたほうがいいんじゃないの」と声を掛けると、ソウタは３人のほうに行き「今は砂遊びがやりたかった」と言いました。タカシに「それなら今日は当番をやらなくていい！」と言われたソウタは、泣きそうな顔で担任に「僕は仲間に入れなくなった」と訴えました。担任が「仲間に入りたいの？」とたずねると、ソウタは「うん」と言い、泣き始めました。

困っている担任にアキラが何か言いたそうにやって来ました。「アキラ君、何か言いたいことあるの？」と言うと、「あれ」と鳥かごの下の受け皿を指差します。担任が「あれを洗う人、誰もいないのかな？」と聞くと、「うん」という返事。ソウタに「どうする？」と聞くと、「僕がやる」と言うので、担任はアキラに聞いてみるように促します。ソウタが「やってもいい？」とアキラに聞くと「いいよ」という答えが返ってきました。ソウタとアキラは皆のところにいきました。

POINT❶》 グループ内の一人ひとりの育ちと子ども同士の関係性の育ちについて考えてみましょう。

記入欄：

POINT❷》 信頼関係を育む援助としてよい点、改善点を考えてみましょう。

記入欄：

POINT❸》 あなたならどのような援助をしますか。

記入欄：

ファシリテーター向け

園内研修用ワークシート 2　「ソウタ君は、もう絶対、仲間に入れない！」

研修の進め方と解説

子ども同士のコミュニケーションを支援する

子ども同士の信頼関係を育てることは、学びの芽生えの土台として不可欠です。しかし、保育者が言葉で指導するだけでは、なかなか子どもの関係性は育ちません。一人ひとりの育ちの差を十分に考慮しながら、仲間の中での立場や役割を意識できるように促しましょう。そのために、保育者がうまく仲介して「子どもの言葉」で伝えていくのは有効な援助の方法です。

この場面でも、グループの中で一人だけ当番活動に協力的ではない子どもがいます。衝突が起こりますが、無理に参加をさせるのではなく、子ども自身に協力の必要性をどう気づかせるようにしていくかがポイントとなります。

POINT❶》グループ内の一人ひとりの育ちと子ども同士の関係性の育ちについて考えてみましょう。

一人ひとりの育ちに差があることに、まず目を向けるべきでしょう。４人に同じように接するのではなく、自分の気持ちだけで動いているソウタが、周囲と協力することの大切さに気づくようにすることが重要な場面です。ソウタがタカシを叩く場面などを見ると、ソウタはどうして自分の遊びを中断しなければいけないのかを理解できていない様子です。タカシ、アキラ、サトシの３人の中には、友だちとの関係性の中で動かなければならないという意識が育っていますが、ソウタはまだ十分に自分の立場を理解できていないようです。

POINT❷》信頼関係を育む援助としてよい点、改善点を考えてみましょう。

保育者は、この事例の中ではソウタを中心にフォローしています。結果としていっしょに当番活動をすることができましたが、ソウタは本当にみんなで協力することの必要性に気づいているでしょうか。タカシやアキラの訴えをうまくソウタに伝えて、「みんなでやりたいんだよね」などと声をかければ、ソウタの中に気持ちの変化を起こすことができたかもしれません。また、ソウタと衝突したタカシへのフォローがないため、タカシの心の中にわだかまりが残ってしまう可能性もあるでしょう。

POINT❸》あなたならどのような援助をしますか。

この場面でポイントとなる援助は、「ソウタ君、どうする？」という保育者の言葉にありそうです。この言葉によってソウタは当番活動に参加することになりましたが、心配して声をかけに来たアキラの気持ちがソウタに伝わったかどうかは疑問が残ります。子どもたちの間に信頼関係を育てていくには、保育者の指導ではなく、グループの中での自分の立場や役割を理解し参加していくことが何より重要になります。そのためには、保育者が場を支えるのではなく、４人を集めてソウタの役割を子どもたちの言葉で伝えるという方法を取ってもよかったかもしれません。

データから見る幼児教育

災害への対応として大事なもう一つのこと
～ネットワークづくり～

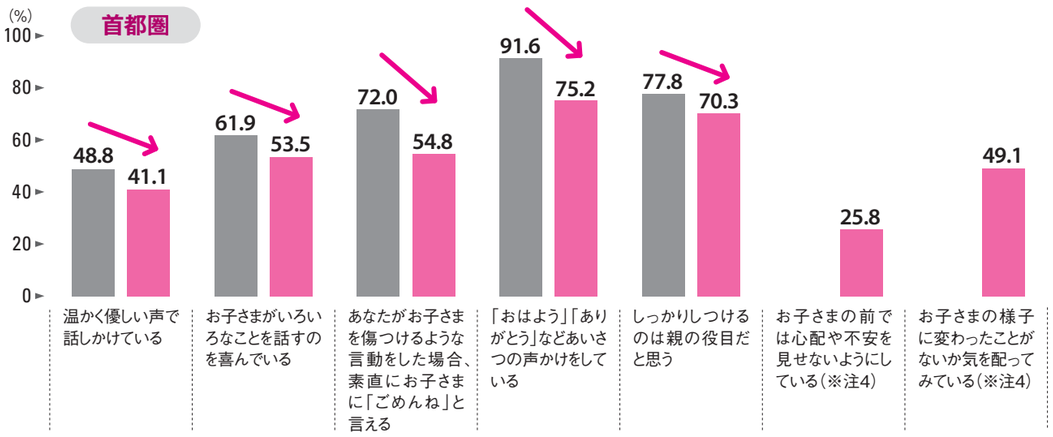
ベネッセ次世代育成研究所は、2011年5月末 、0～5歳児をもつ3,096名の母親に震災による子育ての影響についての調査を行いました。この調査結果からは、非常時における母親の育児不安や、それを軽減するためのヒントが見えてきました。園で家庭への支援を考える材料のひとつとして、また、保護者への発信にもぜひご活用ください。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用される際には、調査名称を記載してください
（例：ベネッセ次世代育成研究所『3.11 東日本大震災の影響　子育て調査』（2011））

首都圏では母親の子育てに対する余裕が減った

Q あなたはお子さまの子育てについて、どのように考えたり、行動したりしていますか。

図1 0～2歳児の子どもへの接し方　■震災前（582）　■震災後（387）



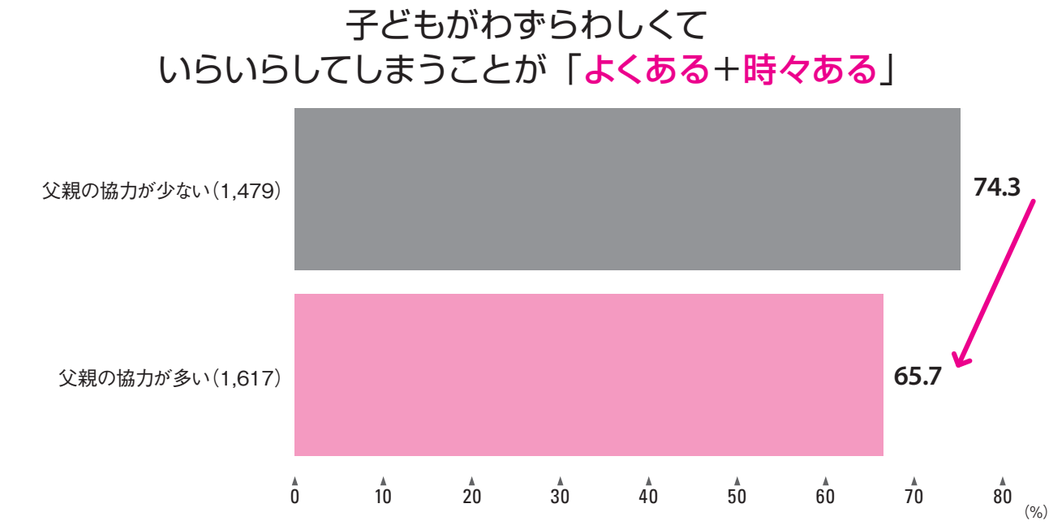
注1：「あてはまる」の%。　注2：0～2歳の第1子をもつ首都圏の母親（387人）の回答を分析。
注3：震災前の数値は「第1回妊娠出産子育て基本調査」（2006年11月ベネッセ次世代育成研究所実施）の結果。　注4：震災後だけの項目

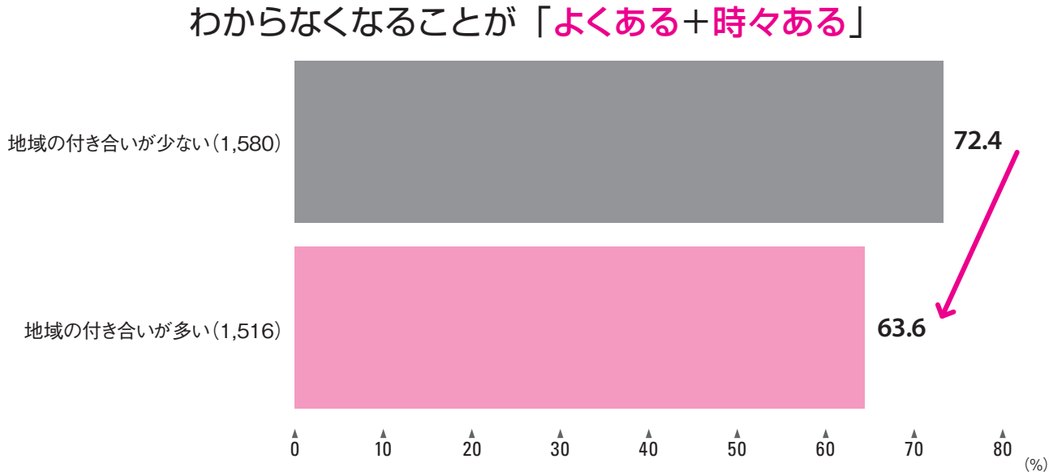
★「温かく優しい声で話しかけている」、「あいさつの声かけをしている」など、温かい態度で子どもに接しているかについて震災前と震災後にそれぞれ聞きました。震災後は「あてはまる」と答えた母親が減少していました。自由記述には「震災以来、イライラすることが増えてしまい、子どもにあたることが出てきてしまいました。反省しているのに、またイライラしてしまう。そんな自分が嫌になります」（首都圏_0歳児の母親）という声も見られ、母親の葛藤が垣間見えます。このような背景には、子どもの命を守るという大きな使命が生まれたために、母親たちに普段の余裕がなくなったのではないかと指摘する専門家もいます。

父親の協力や地域とのつながりが多い母親の育児不安は少ない傾向

Q あなたは最近、子育てについて次のようなことを感じることがありますか。

図2 父親の協力度・地域のつながりと育児不安





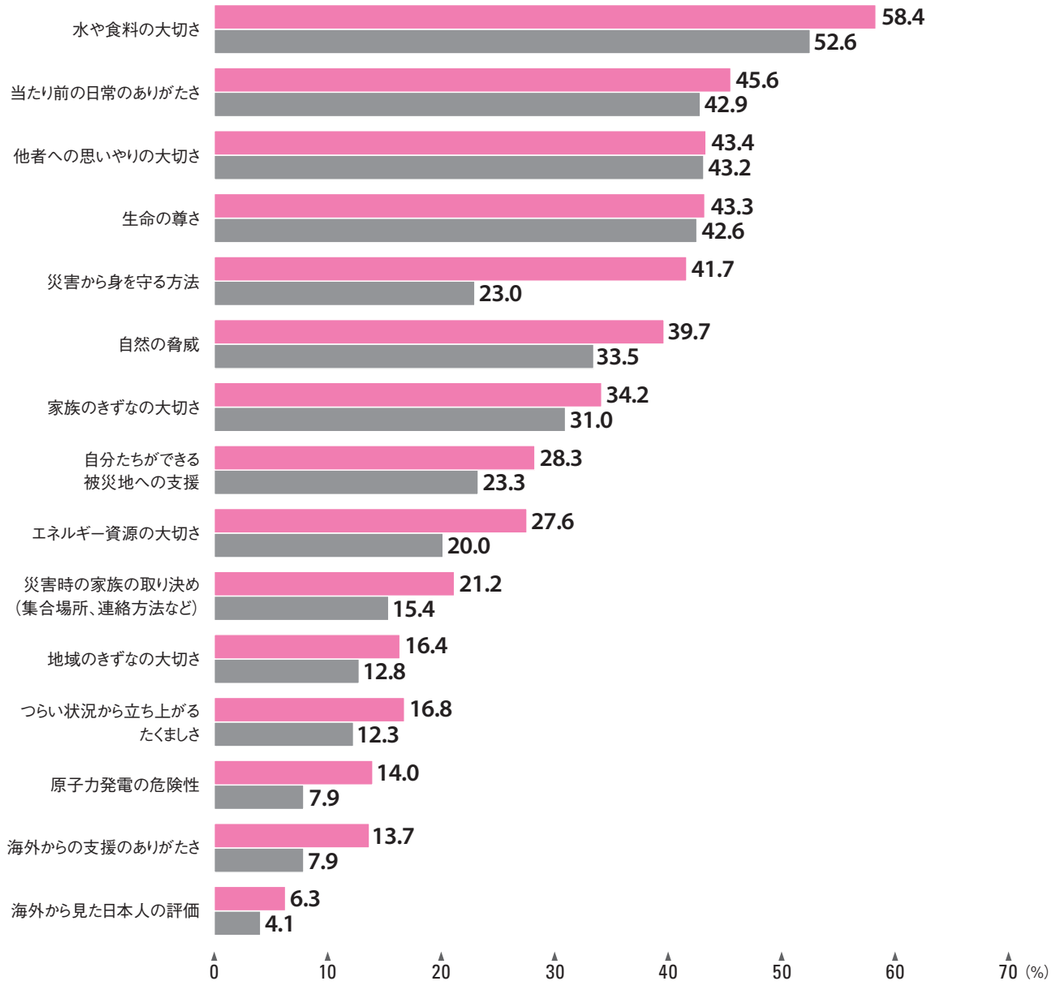
注1：「よくある」＋「時々ある」の%。
注2：「父親の協力度」は配偶者（子どもの父親）の回答者への理解・協力度をたずねた設問、「地域のつながり」は地域の中での子どもを通じた付き合いの状況を尋ねた設問に対する回答を得点化し、各群のサンプル数がおよそ2分の1になるようにわけた。

★子どもの父親が子育てに理解を示したり、協力しているかを得点化し2つの群にわけました（上図）。その上で「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」が「よくある＋時々ある」と答えた母親を見たところ、父親の協力が少ないほうが「いらいらすること」が「よくある＋時々ある」と回答する人が多いことがわかりました。同様に地域とのつながりを分析したところ、つながりが少ないほうが「どうしたらよいかわからなくなること」が多いことがわかりました。また、この傾向は首都圏、首都圏及び東北以外の地域のいずれにも見られるものでした。

震災を機に大切なことを話し合った親子が多い

Q 今回の震災をきっかけに、次のことについてお子さまと話していますか。

図3 3～5歳児　震災をきっかけに親子で話したこと



注1：「すでに話した」の%

★3～5歳児をもつ母親に震災をきっかけに親子で話したことについて聞きました。水や食料・当たり前の日常のありがたさ、他者への思いやりが上位にあげられ、震災を機に改めて大切なことを話し合った親子が多いことがわかります。また、大きな揺れ、帰宅困難な状況を体験した人が多い首都圏は、多くの項目を選択しており、よりたくさんのことを話しあったことがわかりました。さらに、「災害から身を守る方法」「災害時の家族の取り決め」などを話し合うことは、子どもの心を安定させる一面があるということもこの調査結果からわかりました（図表省略）。

出典：**【3.11 東日本大震災の影響　子育て調査】**
調査テーマ：東日本大震災後のお子さまの生活や様子、母親の子育て感情など
調査対象：0～5歳児をもつ母親（3,096 サンプル）
調査地域：首都圏：東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県／首都圏及び東北以外の地域：北海道、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県
調査時期：2011 年 5 月 27 日、28 日
調査方法：インターネット調査

調査データを踏まえ、園ができるもう一つの対応について考える

地域のネットワークを強化し 園、保護者、地域みんなで子どもを見守る

今回の調査では、東日本大震災後に母親の育児不安が高まったことがわかりました。こうした母親の不安を軽減するために、園にはどのような体制作りが求められるのでしょうか。恵泉女学園大学大学院の大日向雅美先生に伺いました。

恵泉女学園大学　大学院教授
大日向雅美
おおひなた・まさみ
専門分野は発達心理学。主な著書に『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』（岩波書店）、『母性愛神話の罠』（日本評論社）など。

園が率先して地域との関係を作り、母親をサポート

今回の調査結果から、災害などで母親のゆとりがなくなると、育児不安も増加するということがわかりました。また、この傾向は特に、夫や地域など、周囲の人々のサポートが十分でない場合に顕著だということも明らかになっています。平常時の子育ての課題が、災害によってさらにくっきり浮かび上がった結果だと言えるでしょう。

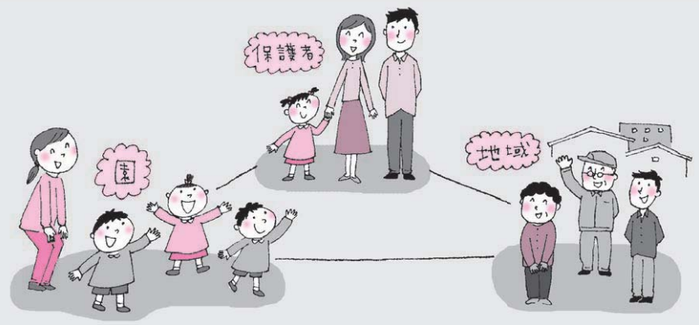
このような母親の育児不安を軽減するためには、園や保育者だけでなく、地域全体で子どもを見守っていることを母親に伝え、安心感を与えることも一つのサポートと言えます。そのためには、避難訓練に力を入れたり備蓄を進めるなどはもちろん、園が率先して地域とのネットワークを築き、災害が起こったときに地域全体で子どもを守れる体制を整えることが大切です。

東日本大震災では、地震が起こった直後に、近隣の方々が園の子どもたちの避難を手伝ってくれたおかげで、津波から逃れられたというケースが多くありました。これは、普段から地域との密なつながりがあったからこそできたことでしょう。

地域に住むお互いの違いを認めることが信頼関係に

地域とのネットワークを作るためには、近隣の人々へのあいさつを意識して行う、町内会の会合やイベントに参加する、園の行事に地域の人々を招待するなど、さまざまな方法が考えられます。また、地域の特徴と資源を知り、それを活用することでつながりを作るのも有効でしょう。ある園では、近隣の農園でブドウ狩りをさせてもらったことが地域との関係作りにつながったそうです。

しかし、一口に地域といっても、さまざまな職業や考え方を持つ方々がいます。最初からスムーズにネットワークを作るのは難しいかもしれません。それでもお互いの違いを認め、地道に交流や話し合いを続けることで、徐々に信頼関係ができあがっていきます。先生がたも「この地域にはどんな産業や企業があるのだろう」「どんな人が住んでいるのだろう」と、好奇心を働かせながら地域の方々と関わっていただきたいと思います。地域を知ることは、同時にそこに住む保護者のことを理解することにもなります。これらのことが、結果的に母親の育児不安の軽減につながるのではないでしょうか。



ポイント

- ◎地域とのネットワークを作り子どもの安全を確保する
- ◎地域の資源を知り、活用することで関係を深める
- ◎地域の人々や保護者のことをよく知る

第2特集

保育者の「良さ」「強み」を生かす15のアイディア

若い保育者が生き生きと活躍するためには、保育者間の信頼関係が必要です。
保育者が互いに認め合えるよう、各自の「良さ」「強み」を引き出したいものです。

インタビュー

保育者本人も気づかない良さ、強みを発見し、園全体の力にする

保育者の育成は「ここまでやればよい」というゴールはありません。
常に学び続けることが必要だからこそ、一人ひとりが良さや強みを自覚し、
園の一員としての自信をもつことが大切です。特に若い保育者へのサポートについて、
聖徳大学の篠原孝子先生にお話をうかがいました。

園の環境が変わった今 若い保育者へのサポートが重要

保育の現場では若い保育者の離職率の高さが課題となっています。本来ならば園で中心的な役割を担うベテラン層が減り、若い世代の保育者の割合が高くならざるを得ない昨今、若い保育者の育成は園長にとって、まさに急務と言えるでしょう。

私が園長を務めていたのは今から10年ほど前ですが、当時はまだベテランの保育者が多く現場で活躍していました。そのような環境下では園長にとって、一人ひとりの保育者の「持ち味をどう生かすか」が重要なテーマになります。しかし今の状況ではその一つ前の働きかけ、つまり一人ひとりの保育者の「良さ、強みを引き出す」ことがとても大切になります。

園環境の変化は保育者ばかりではありません。家庭や地域のありようが変わったことで、基本的な生活習慣がまだ身についていなかったり、自分のことを自分でやろうという気持ちが弱かったり、あるいは自分の気持ちを相手に伝えることが苦手だったりと、さまざまな面で最近の子どもたちの育ちが十分でないことは、多くの保育者が既にお気づきのとおりです。

そのような中で若い保育者が現場に立ったとき、「大学で学んできたことと違う」「私に務まるのだろうか」と壁に直面してしまうことは、実は当然のことなのかもしれません。園長やベテランが若い保育者の自信を引き出し、園の中で良さや強みを発揮できるように仕掛けることが、保育者育成においてこれまで以上に大切なのだと私は思います。

聖徳大学
児童学部教授
篠原孝子
しのはら・たかこ

◎東京都公立幼稚園で31年間幼児教育に携わった経験をもつ。2010年3月まで文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官。著者に『こうすればうまくいく!幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント』(共著・ぎょうせい)など。

技能以外の見えにくい力も園長だから見つけられる

では、若い保育者の良さや強みをどのように見つけていけばよいのでしょうか。

ピアノや歌、ダンス、あるいは描画、工作などの分野での保育者の良さ、強みは、日々の子どもたちとのかかわりの様子をじっくりと観察することで、比較的容易に見えてくるでしょう。このような分野で良さ、強みを持っている保育者が、園の中心となって生き生きと活動するようになると、子どもたちの表情もとても生き生きとしてくるものです。

ただ、保育者としての良さ、強みはそうした技能的なものばかりではありません。アイディアを出して企画する力、保護者と打ち解けてコミュニケーションする力、さらに園の中を片付け、整理整頓する力など、直接子どもに働きかけるものではなくても、園運営の中で欠かせない力はいくつもあります。

こうした素晴らしい力を持っているのに、当の本人がそれに気づいていないことは少なくありません。若い保育者を肯定的に見ることでこのような力を発見し、良さや強みとして本人に自覚してもらい、さらに園の力として全体に波及させていくのはまさに園長だからできることでしょう。

園長やベテランから「あなたのおかげよ」「ありがとう」と声をかけられれば、若い保育者の中に自信が生まれます。すると、日々の保育にも余裕が生まれ、結果的に保育の力も高まってくる。これはどんな仕事でも同じではないでしょうか。

本人が一番困っていることに目を向け そこから育て上げていく

常に良いものへと変化を求める園であるためには、若い保育者のエネルギー、明るさが欠かせません。若い保育者が自信を持って行動できるようになるためにも、それぞれの良さ、強みを見つけることが求められます。

「若い保育者を見ると、足りないところばかりが気になってしまう」というベテランの保育者も、もしかするといるかもしれません。そんなベテランに対して園長は「あれもこれもと求めるのではなく、まず本人が一番困っていることに目を向けて、そこから少しずつ育て上げていくようにしませんか」とアドバイスしてはどうでしょうか。相手を細やかに見ることで、良さや強みも自然と見えてくるように思います。振り返れば私自身、若いときはそういうかかわりを先輩方からしていただいていた気がします。

保育は、さまざまな子どもや保護者との出会いを通して、日々学んでいく仕事です。若い保育者にとって園長やベテランの支えは、ますます必要になっていると私は思います。

篠原先生のアイディア

ほめるときは、雑談の中でさりげなく

◎以前、同じ学年の二つのクラスが雪だるまをつくったことがありました。一方のクラスは、まず保育者が見本をつくり、それから子どもたちがつくり始めました。それに対して、もう一方のクラスでは最初に子どもたちに「目を閉じて、世界で一つしかない雪だるまを想像してみて!」と呼びかけました。このように、子どもが主体的に活動できるような声かけができることもこの保育者の良さ、強みでしょう。こういう声掛けを園長がきちんとほめることで、一人の保育者の心がけが園の中に自然に伝播していきます。ただし、ほめるのは会議などの場よりも、日々の雑談の中がお勧めです。あらたまった場で評価すると「園長がいいということをやろう」と個々の保育者の自主性を損ねてしまいかねないからです。

アイディア集

保育者の良さ、強みを生かす 15のアイディア

新任や若手の保育者がそれぞれの良さや強みを発揮するには、園長やベテランからの働きかけが欠かせません。
全国の先生方におうかがいした日々の取り組みの中での心配りやアイディアを紹介します。

保育者の良さ、強みを生かした実践例

1. 食事会などの交流で見つけた才能を生かし、保護者ともよい関係に

良さや強みを見つける理由 私がいた園は職員数が少なく、一人が2人分以上の働きを求められます。一人ひとりの持ち味を把握し、それを生かすことは園長の大切な役割です。

心がけたこと 取り組んだこと 保育者の隠れた才能を見つけるために、職場のコミュニケーションだけでなく、食事会など園外でも交流を深め、お互いに自分のことをよく話すきっかけづくりを心がけました。

実際にあった出来事と効果 食事会で自己紹介をかねて趣味の話をしてもらったところ、ある保育者が手芸が得意だとわかりました。彼女が講師になって、保育者全員で修了式用のコサージュをつくったところ保護者にも大変好評で、翌年から保護者を対象にした講習会も開かれるようになり、保護者との関係にも良い影響を与えました。その保育者はこのことをきっかけにクラス懇談会でも自分の考えを自信をもって伝えられるようになりました。

（元公立幼稚園長）

2. 特技や趣味を自己申告してもらい、仕事に生かして自信を

良さや強みを見つける理由 職場の中でスタッフの持ち味を生かすことは、保育者一人ひとりのキャリア形成につながります。保育者にも、キャリア形成を園運営の重要な方針の一つに位置づけていることを伝えています。

心がけたこと 取り組んだこと 自分の特技や趣味などを自己申告書に自由に記入してもらい、ヒアリングを定期的に行っています。それをＰＴＡ広報誌などに掲載し、園の強みとしてＰＲしていますし、園内で周知することで「パソコンなら○○先生」などと園での役割分担にも生かしています。

実際にあった出来事と効果 特技や趣味を生かせることで、仕事を通して自己実現を味わっています。笑顔が多くなり、行動もテキパキとし、一人ひとりが明るい雰囲気になっています。保育者として自信が少しずつ育ち、保育が徐々に確立されているようです。保育の運営は充実したチーム体制のもとに行われます。保育者同士が相互に理解し合い、良さを生かし合うことが園の活力につながります。

（公立幼保一体施設長）

3. プライベートを充実させて、保育者の活力も保育の力もアップ

良さや強みを見つける理由 幼児にとって最大の教育環境は保育者自身であり、保育者自身の人間性や価値観は大きな影響を与えます。さまざまな経験を通して保育者にも自分の感性を磨いてほしいと考え、プライベートな時間を有効利用してもらえるようにしました。

心がけたこと 取り組んだこと 保育者が自分を磨いたり、得意分野をつくったりする時間を持てるように、仕事量を調整しました。いつまでも長く仕事をせず、休みの日は休むなど、当たり前のことができる職場の雰囲気をつくりました。

実際にあった出来事と効果 大学時代にダンス部に所属していたある若手保育者が、劇団に参加し、仕事とプライベートの時間をじょうずに使い分けるようになりました。それまでは自信のなさがうかがえた彼女ですが、プライベートが充実したことで表情も明るくなり、子どもたちへの言葉掛けや周囲への働きかけも豊かになりました。もちろん、彼女のクラスの子どもたちはダンスがとてもじょうずですよ。

（公立幼稚園長）

4. 得意を発揮する場面を作ることが自信につながり、不得意分野にも挑戦

良さや強みを見つける理由 新規採用の保育者の着任が続いたため、本人が自信をもてることを保育に生かしたいと考えていました。

心がけたこと 取り組んだこと フルートの演奏が得意な保育者には、所属している楽団のメンバーと一緒にミニコンサートを開いてもらっています。保育者がフルートを吹くと、子どもたちからは「先生、すごい！」と歓声が上がっています。また絵画制作が得意な保育者には新しい歌を教えるときに歌詞に合った絵を描いてもらい、絵を見せながら歌を教えています。

実際にあった出来事と効果 子どもたちやほかの保育者に得意なことを認められ、実際に保育に役立てていることから、自分に自信を持つことができているようです。当人たちは、「絵の描き方を教わりたい」「ピアノを練習したい」など、自分の得意なことを教え合い、さらに不得意分野にも挑戦しようという意識が芽生えており、保育者としての成長を感じます。

（公立幼稚園長）

5. 誕生会で宣言した目標で保育者同士がつながる

良さや強みを見つける理由 保育者が自分の得意を発揮し、自信を持つことで、ほかの保育者や子どもたちにも「やってみよう」「やってみたい」という気持ちを抱かせることができると考えています。

心がけたこと 取り組んだこと 親睦を深めるために月ごとに職員の誕生会を開いています。ケーキを食べながら誕生日を迎えた当人たちにこれからの1年の抱負を話してもらい、またほかの保育者からはお祝いのメッセージとして、日々の保育の中でがんばっていると思うこと、素晴らしいと感じたシーンなどを話してもらいます。

実際にあった出来事と効果 誕生日を区切りに1年を振り返ったり、新しい目標を立てたりすることが成長の機会となっています。また、一人の保育者が掲げた目標に「私も一緒にチャレンジしたい！」と賛同する者が現れることも多く、保育者間のチームワーク強化につながっています。

（私立認定こども園長）

全国の園長先生からのアイディア

6. 保護者のほめ言葉で得意分野をさらに発揮

＊

◎行事のあとには、保護者の方にも感想をいただいて、子どもたちと同じように良かった点はほめていただくようにお願いしています。経験を重ねるうちに担任の個性やクラスのカラーが出るようになり、「これを教わるなら○○先生」と子どもたちも保育者への親しみが変わってきました。（千葉県・私立幼稚園）

7. 意識的にほめることで積極性が増す

＊

◎自分から進んで「これが得意分野です」と発言することはなかなかないので、保育中から「これじょうずね」「今度みんなの前でやってね」と管理職から保育者に話しています。本人は気づかないことでも、周囲からそのように「見られている」「評価されている」と考えるようになり、積極性も出てきています。

（秋田県・私立幼稚園）

8. 保育者をチームに分けて専門性を深める

＊

◎保育者を「生きもの」「植物」「外あそび」の3チームに分けています。それぞれの得意分野で更に専門性を深められる様に話し合いの場を設けています。その分野が得意でなかった若い保育者がチームの中で経験のある保育者から知識を伝達してもらい、学びの機会となっています。

（東京都・私立保育所）

9. 面談で得意を共有し保育に生かす

＊

◎年度の初めに保育者と面談をして得意分野を共有し、保育の中で強みを生かすため具体的に話をしています。個々の強みが他の保育者と融合できるように、ミーティングや会議などで月間計画にうまく取り入れ成長につなげています。

（神奈川県・公立保育所）

10. 園外活動への参加でアイディアが豊かに

＊

◎市民サークル（吹奏楽団など）に所属することを奨励しています。保育の中にさまざまなアイディアを導入することができるようになり、地域や保護者との連携に成果が生まれつつあります。

（北海道・私立幼稚園）

11. 自分で決めることで実践にも心がこもる

＊

◎年度初めに保健衛生、リズム表現、食育などと担当保育者を決め、年間の計画を立ててもらいます。自分で担当したいものを選ぶので計画から実践まで心がこもっています。自信をもって子どもたちにかかわれるようになるので、笑顔が多くなり、気持ちに余裕が見られます。自分からもいろいろと研究するようにもなります。

（青森県・私立保育所）

12. 若い保育者を中心にベテランとの交流を活性化

＊

◎研修などでグループ分けするときは、なるべく若く、経験の浅い人をリーダーにしています。そうすると、ベテランの保育者への質問や相談が増え、自分の得意分野をさらに伸ばすのと同時に、ベテランとの交流も増し、一石二鳥です。園長は出しゃばらず、お茶をいれたり裏方にまわり、研修の最後にねぎらいの言葉と誉め言葉を、そして、こんな方向に進めてほしいと希望を述べます。研修の資料やまとめをしっかりするようにしているので、とても力がつきます。

（鹿児島県・私立保育所）

13. 自主サークルでお互いに刺激し合う

＊

◎音楽リズム・運動、表現等の活動で、得意分野の自主サークルが園内に自然発生しました。ピアノの連弾発表や、手作りシアターの発表、朝の体操の振りつけなど、子どもの前で表現できる機会を作り、お互い刺激し合っています。自分の得意分野で先輩と後輩とがかかわる力をつけ、自分の得意分野を充実させることで新たな分野へチャレンジしていく姿が見られます。保育者間の絆（きずな）も深まり、子どもたちと一緒に過ごす日常の質が高まっています。

（岐阜県・私立幼稚園）

園長やベテランの保育者の心構えについて

14. 肯定的なまなざしを徹底することが良い保育を生む

保育者一人ひとりの良さを見つけ、伸ばそうと、園長や主任が日々強く意識することが何より大切です。そのような肯定的な意識を持ちながら保育のさまざまな場面の中で保育者がどんな仕事をしているのかを見ていけば、若手も「自分のことをしっかりと見守ってくれている」「私の良さを分かろうとしてくれている」と安心感を持つはずです。園長の視線をあたたかく感じながら、伸び伸びと自分を発揮することで、結果的によい仕事ができるでしょう。

相手の良さを見つけようという姿勢が大切なのは、保育者育成でも保護者支援でも全く同じことだと思います。まず園長がそうした姿勢を示すことで、園全体に必ずよい影響が表れるはずです。

（元公立保育所長）

15. 園長や主任が「迷い」を話すことで若手の心を開く

私は、保育中に目にした子どもたちの楽しそうな様子や、保育者の生き生きとした姿を園の中で必ず話題として取り上げるように心がけています。それによって保育者それぞれの良さや強みを認め合い、園全体の力としていけるような土壌づくりにつながるからです。また、大事なのはよかったことばかりではなく、子どもとのかかわりや保育者とのやりとりで生まれた悩みや疑問も話題にすること。そうした内容を気軽に言葉にできるような雰囲気になるためには、まずは園長や主任から自分が迷ったことなどを積極的に話題にしていくことが必要でしょう。保育の仕事にはこうすればよいという正解はありません。たとえ経験が浅くても、自分が良いと思うことを若手からも発信することが、園の力を向上させるのだと日ごろから折に触れて話しています。

（私立保育所副所長）

現場のみなさんへ

聖徳大学児童学部教授
篠原孝子

◎子どもたちがそれぞれのよさや可能性を発揮して活動を楽しんでいる園では、保育者全員が知恵を出し合って子どものやりたいことが実現できるように配慮しています。さらに、保育者同士が互いのよさや強みを知っているのも特徴です。自己を発揮する場があること、肯定的に受け止められている安心感があること、プライベートなことも話しやすい雰囲気があること、そして保育者のよさを見いだす管理職がいることが重要なのではないでしょうか。

これからの幼児教育

120%活用のヒント

その3

年３回お届けしている『これからの幼児教育』。園運営や保育の質の向上に少しでもお役立ていただければと願っております。そこで今回は、編集部より本号の活用のご提案と、全国の幼稚園・保育所の園長先生から寄せられた前号（特集：運動遊び）の読者ハガキの声から一部をご紹介します。

本号のコーナーは こんな使い方もできます

第１特集 ▶2ページ～

◎園長先生が園運営の参考資料として活用されるのはもちろんのこと、園内の保育者間で回覧したり、職員会議、さらに保護者会の資料としてお役立てください。特に重要部分にはアンダーラインを引いたり、イラストや図解で説明したりしています。その部分を重点的に共有すれば短い時間でも効果的に情報の共有や研修を行えます。

データから見る幼児教育 ▶14 ページ～

◎園内研修に際して、非常時の子育ての実態や保護者の意識を把握するための参考として、また、保護者会や園だよりの情報発信の材料としてもお役立てください。

第２特集 ▶18ページ～

◎まずは指導的な立場にある先生がご覧ください。記事のアイディアを実践していただくことや、自園の取り組みにさらに磨きをかけることもおすすめです。また、個々の先生や自園にあった得意分野の伸長をサポートするアイディアを考えるのもよいと思います。

※冊子はホームページからもダウンロードできます。また、追加発送も受け付けております（ただし、数に限りがあります）。詳しくは巻末をご覧ください。

2011年秋号について

全国の園長先生から寄せられたご感想

●第一特集の運動遊びの記事は、遊びで育つ子どもの様々な能力についてわかりやすく述べられていて、保護者会で話をするためにとてもよいヒントになりました。（兵庫県・私立幼稚園）

●第一特集の記事にあった「遊びから考える力やコミュニケーション力を獲得する」という内容は私自身の考えと同じです。自分が間違ってなかったと確認できたので、ますます保育にやる気になりました！（福岡県・私立幼稚園）

●のめり込む遊びの要素や、遊びにおける保育者の役割はポイントをおさえて説明してあるのでわかりやすく、良かったです。気持ちよく体を動かせる時期なので、体を動かして遊ぶことの意味をもう一度、職員で確認し合って取り組みたいと思いました。（静岡県・公立幼稚園）

●震災後に何か対応策をとらなくてはいけないと思っていましたが、具体的には思いつかず、行動できていませんでした。他の園の災害対策の取り組みを知り、とても参考になりました。（鹿児島県・公立幼稚園）

●各園での防災への取り組みを知ることができて、とても参考になりました。特に、ペットのトイレ用の砂は購入してみようと思います。（熊本県・私立幼稚園）

●防災の取り組みは机上のマニュアルだけでは不安であるし、また自分の園内だけでも、不完全であるので、それぞれの園の実際の取り組みが非常に参考になりました。（奈良県・公立保育所）

●第二特集「結果よりも成長プロセスに注目してもらうために」というサブテーマに共感しました。保護者の中には、１等になったら○○を買ってあげるなど、勝敗や順位ばかりを気にするかたもいるので、運動会前後には、その点をしっかり伝えていこうと思いました。（石川県・公立幼稚園）

●運動会が近づき、運動会のねらいをもう一度、考えるきっかけとなりました。当日だけでなく練習の様子も保護者に伝える必要性も学びました。さっそくクラスだよりで知らせました。（山口県・私立幼稚園）

●運動会当日は勝敗や子どもの失敗などで一喜一憂しがちですが、子どもが園生活を通してどう育ってきたかをきちんと伝えたいので、運動会の見方を園長のあいさつの中にとり入れたいと思いました。（愛知県・公立保育所）

●運動会までの保育の中で、子どもたちの成長や経験していることをどのように保護者の方に知っていただくか、具体的に学ぶことができました。学級だよりを意識して作成していきたいです。（東京都・公立幼稚園）

本誌は無料です

ベネッセ次世代育成研究所の発刊物は、ご希望に合わせて園へお届けします

※ただし、複数冊をご希望の場合は、岡山県からの宅配料がかかる場合がございますので、あらかじめご了承ください。

お手続き方法

ベネッセ次世代育成研究所ホームページ、もしくは、電話でお申し込みください。
通常はお手続き完了から**１週間～10日程度**でお届けします。

ホームページ

インターネットで検索してください。▶▶▶ ベネッセ次世代育成研究所 検索

http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/

◎本誌はもちろん、乳幼児の子育てに関する調査や、幼稚園長・保育所長を対象とした調査の報告書など、ベネッセ次世代育成研究所の発刊物のお申し込みと閲覧（PDFファイルのダウンロード）が可能です。お急ぎの場合は、インターネットのご利用が便利です。

電話

0120-933-964
通話料無料
受付時間◎10:00～17:00
（日曜・祝日は除く）

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。
※携帯電話・PHSからもご利用できます。
※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は086-214-6337へおかけください（ただし通話料がかかります）。

お問い合わせの際、**必ず、下記の内容をお知らせいただきますよう**お願いいたします。

❶お届け先の住所・所属・お名前　❷お届け先の電話番号　❸ご希望の冊子名（例：冊子名や発行年、季刊号をお知らせください）
❹ご希望の冊数　❺冊子を知ったきっかけ　❻ご希望の理由（活用方法など）

注意事項
・ご記入いただいた内容に不備がある場合は、送付することができませんのでご了承ください。
・在庫数には限りがあるため、送付をいたしかねる場合、または、送付までにお時間をいただく場合があります。

他の園にもぜひご紹介ください！『これからの幼児教育』の定期的な発送をうけたまわります。

◎お知り合いの園で『これからの幼児教育』が届いていない園がありましたら、ホームページか電話で上記の内容をお知らせください。定期的な発送をいたします。
※なお、定期的な発送は1園につき、1冊とさせていただきます。個人宅にはお送りできませんのでご了承ください。

発刊物のご紹介

これからの幼児教育

2011年 秋号
特集
のめり込める遊びで幼児の心と体は育つ

A4判 20ページ

◎主な記事の内容

2011年夏号 特集 情報発信で保護者と「つながる」園をつくる
春号 特集 園の遊びがもたらす幼児期の学びの芽生え
2010年秋号 特集 特別なニーズをもつ子に寄り添う保育
夏号 特集 家庭と連携した食育活動のあり方※
春号 特集 保護者の成長を促す園の支援※
2009年秋号 特集 保育者の資質を高める園内研修
夏号 特集 幼保一体化と新しい幼児教育
春号 特集 幼小連携に向けて現場が取り組むべきこと
2008年秋号 特集 幼稚園教育要領改訂を日々の保育にどう生かす？
夏号 特集 幼稚園教育要領改訂のポイント

※在庫切れのため、ホームページからダウンロードしてください。

◎その他、幼児教育・保育に関する発刊物

第1回 幼児教育・保育についての基本調査報告書（幼稚園編・保育所編）
◎全国の幼稚園・保育所を対象に、幼児教育・保育の実情と課題を調査から明らかにしました。
B5判 160ページ

幼児の遊びにみられる学びの芽
◎4～5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。
A4判 72ページ

保育所での子どもの発達と保育のポイント
◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。
A4判 112ページ

※在庫数に限りがあるため、ご希望の冊数をお届けできない場合があります。ご了承ください。

編集後記　第二特集「得意分野」はいかがでしたか？私も経験がありますが、上司から自分の得意分野や強みについてほめられることは、自分への新たな気づきだけでなく、自分が評価してもらえているという気持ちにもつながり、仕事へのやる気が高まります。記事を参考に、得意分野の発見に取り組んでいただければ幸いです！（橋村）

「これからの幼児教育」2012春号　2012年1月20日発行

発行人　新井 健一
編集人　後藤 憲子
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
〒163-0411
東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビルディング
企画・制作　ベネッセ次世代育成研究所
印刷・製本　共立印刷株式会社
編集協力　（有）ペンダコ
二宮 良太
撮影協力　ヤマグチイッキ
荒川 潤
イラスト協力　アサヌマリカ

次号予告　2012 Summer 夏
これからの幼児教育
次号は2012年5月下旬発刊（予定）
年3回の発刊（予定）です

©ベネッセ次世代育成研究所　◎無断転載を禁じます　※掲載内容は2011年12月下旬現在のものです。